総括にかえて

平子達也
（駒澤大学）

はじめに

- ~~５つの発表の内容を踏まえながら~~，日琉諸語・諸方言（**特に本土諸方言**）の動詞・形容詞に関する記述的研究について，平子が考えている（抱えている）課題を提示
- ５つの発表に対して一貫したテーマでコメントをするものではない

- 動詞・形容詞の形態論的記述は，日本語諸方言の記述的研究において，古くて新しい課題
- 相当に充実した形態論記述は，本土側でも古くからある
  - 尾張方言の例
    - 愛知県教育委員会（1985）
    - 新修稲沢市史編集会（1982）
- **とは言いながら，やはり課題はある**

- 上野（2003）を元に平子が考えた課題
  1. **語幹及び接辞・接語，派生及び屈折の詳細な記述（語の認定とその文法範疇の記述）**
  2. **例外と方言語彙の調査**
  3. パラダイムの「穴」の記述
  4. 当該形式の使用頻度，複数形式間の機能差の記述

語の認定と文法範疇の記述

- 品詞分類（狩俣先生の麻生氏への質問も）
  - 屈折型形容詞が存在するか否か
    - 白田氏発表の喜界島，麻生氏発表の波照間など
  - 特に本土側では，標準語（東京方言）の「形容動詞（ナ形容詞・形容名詞）」に相当するものの扱いも問題に

- 一般の形容詞と異なる「形容詞」を設定するか否か
  - 出雲方言の「形容動詞（ナ形容詞・形容名詞）」

（1）*sizuka=na=naa / sizuka=nat-ta / sizuka =nat-tara*

「静かだね」/「静かだった」/「静かだったら」

- どんな語が「形容詞」っぽく振る舞いやすいか，は記述しておきたい（下記引用は福岡市方言についての平塚 2014）
  - 「この品詞に属する語には、形容詞的な活用を多くとる語（「下手（だ）」「楽（だ）」「きれい（だ）」など）と、一部形容詞的な活用をとる語（「静か（だ）」「豪華（だ）」「有名（だ）」など）がある」

- 「語」をどのように認定するか
  - 語は音韻的にも形態統語的にも自立している
    - 接辞は音韻的にも形態統語的にも非自立（従属）
  - 音韻的自立性は，しばしばアクセント（音調）が手掛かりになる
  - 形態統語的自立性は，当該要素の順序の自由度や当該要素間に別要素を挿入できるか否かが手掛かりになる

- 必ず微妙な例は出てくる
  - 音韻的振る舞いと形態統語的振る舞いのズレ
  - 接語（音韻的には非自立・形態統語的には自立）などの単位を設定することである程度は解消される
- 問題は，音韻的には（１つの）語より大きく見える一方，形態統語的には語あるいはそれより小さい場合（逆は？）
  - 麻生氏発表の波照間方言の属性動詞などの例
    - アクセント的には２単位（２語的）でありながら，形態統語的には１語とせざるを得ない

- このような例は本土方言（古代語含む）でも見られる
  - 木部（2011）の天草本渡方言
  - 平安時代語の完了「リ」
- 音韻的自立性を問題にする以上，形態論的分析においてアクセントの情報が必要（アクセント分析に形態論的分析は不可欠）
    - N型・非弁別的アクセントの方言においても

- アクセントだけで区別される語形
  - 麻生氏発表の波照間方言の継続と完了

- 尾張方言（愛知県一宮市旧木曽川町方言）の例（1）
  - *-ta]r-*（～してある）と*-tar-*（～してやる）

（2） *kat-[ta]r-u* 飼ってある

（3） *kat-[ta]r-u* 買ってある

（4） *kat-[tar-u* 飼ってやる

（5） *kat-[tar-u* 買ってやる

cf. 「飼う」*[ka]-u*, 「買う」 *ka-[u*

- **接辞のアクセント情報と語幹のアクセント情報との関係で出力形が決まると記述するか，出来上がった当該の語形全体について「～型になる」と記述するか**
  - 田窪先生・Davis先生の麻生氏への質問・コメント
- 分析の仕方は，立場により異なる
  - 山田氏発表のde Chene氏の分析，新永氏発表
    - （私見では）N型アクセントでは「接辞側にアクセント情報があって・・・」とするのは困難があるかも
    - 波照間方言の継続形や完了形は２つのアクセント単位に分けらるが，そうではない場合は？
      - 喜界島方言の継続相のアクセント

- 尾張方言の例（2）
  - *-te ma(w)-*：「～して しまう」or「～して もらう」
  - （6） *[ka]t-te ma-u* 飼ってしまう
  - （7） *kat-[te] ma-u* 買ってしまう
  - （8） *kat-[te ma-u* 飼ってもらう
  - （9） *kat-[te ma-u* 買ってもらう

- 形態的な自立性はある程度ある
  - （10）*[ka]t-te=wa mat-ta=kedo*（lit. 飼ってはしまったが）
  - （11）*kat-[te]=wa mat-ta=kedo*（lit. 飼ってはもらったが）
  - ただし，*ma(w)-* だけで使うことはない（平子の内省）
- アクセントの違いは明らかに２つの*-te ma(w)-*から
  - ２つの*-te ma(w)-*それぞれがアクセント情報を持つ？
  - 「てもらう」形と「てしまう」形，それぞれについてアクセント型を記述する？

拡張分節と拡張語幹

- 拡張分節と拡張語幹という考え方：セリック氏発表
  - 拡張分節という「無意味形態素（？）」を認めるべきかは，相当に慎重であるべき
- 印欧諸語などの記述でしばしば用いられる概念ではあるものの，拡張分節が接辞の異形態に含まれるものとして処理すべきか否かを検討した上での結論であるべき（私見）
  - 下地（2018: 7.2.4節）も参照
  - セリック氏発表

- 共時態化の問題：セリック氏の発表から少し脱線
  - 拡張分節を，中古宮古語にも「拡張分節」として認めるべきか
    - 中古宮古語において *buduri（C:已然形対応）が再建されるとして，それを*budur-i-（拘束形態）とすべきか，*budur-i（自由形態[≒語]）とすべきかは，中古宮古語における形態**統語**論の再建が必要

- 古典語の場合（私見）
  - 「未然形」は認めない
    - *ik-azu*（否定）; *ik-am-*（推量）; *ik-are-*（受身など）, *ik-ase-*（使役など） は，少なくとも否定形とその他とでアクセント上の振る舞いが異なる
      - 橋本四郎や屋名池も「未然形」を認めていない

- 古典語の場合（これも私見）
  - 学校文法でいう「連用形」（のうち少なくとも以下のもの）は，一つの活用形としてひとまとまりにして良い
    - *kak-i*（連用中止）, *kak-i-te*（継起）, *kak-i-tar-i*（完了）
    - *-i* という派生接辞（拡張分節ではない）
      - これらはアクセント上の振舞が同じ（と見れる）
      - de Chene[山田氏発表]におけるRYと異なる
  - 「連用形名詞」はアクセント上の振る舞いが「連用形」と異なるので，別とみる
    - 「連用形名詞」は無核，「連用形」は有核

例外と方言語彙の調査

- 標準語の「行く」のような例外的なものの記述
  - 出雲方言では *ikita* 「行った」
  - 東北・関東諸方言の *arutta* 「歩いた」など
- 方言特有の語彙でも
  - horogu（ゴミなどを払い落とす）, marugu（束ねる）が促音便に（雫石方言，上野 2003）

- 尾張方言の例（3）
  - *[cjoodæ]æs-u*「くれる／くださる」； *cjoos-u* 「くれる」
    - 過去形 *cjoodææ-ta / cjoodææs-ita* ；*cjoo-ta / ?cjoos-ita*
    - 継起形 *cjoodææ-te / cjoodææs-ite*；*cjoo-te / ?cjoos-ite*
    - 命令形 *cjoodææ / cjoodææs-e*；*cjoo / cjoos-e*

パラダイムの「穴」の記述

- ある活用形がない，あるいは，形は作れても使用場面が思い浮かばない，などの記述
  - *ar-*「ある」を命令形で使わない（雫石，上野 2003）
- ある（派生）語幹が，ある種の接辞と共起しないなど
  - 麻生氏発表の波照間方言の継続・完了
  - 接辞の承接順序（内部構造）の記述も必要
- 補充法に関する記述も（本土に（どれぐらい）あるのか？）
  - 首里方言の*ikjuN*と*izji*など

- 尾張方言の例（4）
  - *-tokure*（~*-dokure*）「〜してくれ」は，命令形でしか使わない（愛知県教育委員会 1985）

- 尾張方言の例（5）
  - *-tor-*（継続）
    - 尊敬接辞 *-jaas-* とは共起しない
    - 継続尊敬は *-ter-jaas-* （?? *-tor-jaas-*）か *-tor-asse-*
  - *-te or-* の文法化と，*-jaas-*と存在動詞との結びつき
    - **orjaasu* / *okirjaasu*

- 麻生氏発表の波照間方言の継続と完了
  - 副動詞形が作れない
- 尾張方言の例（6）
  - 発表者は，*-jaas-*（尊敬）の否定形を作れない
    - **kak-jaas-an* / *okkak-asse-n* 「お書きにならない」
  - 愛知県教育委員会（1985）の表でも *-jaas-*の否定は空欄

各語形の使用頻度

- 全ての文法形式を網羅的に認定するためには，おそらく調査票調査だけでは漏れが出る
  - **談話資料の利用**が有効
  - 近隣の方言の資料でも有用
- その上で，各語形の使用頻度は知りたい
  - 特に，似たような意味・機能を持つ形式の頻度の差などは知りたい
  - あるいは，両形式の機能差も記述したい：白田氏発表

- 尾張方言の例（6）
  - *-jor-*（継続）
    - 使うかどうか確認すれば出てくるものの，自然談話では，ほぼ全て *-tor-*
    - *-jor-*は*-jot-ta*の形で過去（の習慣）で使うのが普通
    - 発表者の世代では*-jor-*は基本的に使わない

おわりに

- 上野（2003）を元に平子が考える課題
  1. 語幹及び接辞・接語，派生及び屈折の詳細な記述（語の認定とその文法範疇の記述）
  2. 例外と方言語彙の調査
  3. パラダイムの「穴」の記述
  4. 当該形式の使用頻度，複数形式間の機能差の記述

参考文献

愛知県教育委員会（1985）『愛知のことば：愛知県方言緊急調査報告』

上野善道（2003）「記述方言学」日本方言研究会（編）『21世紀の方言学』87-100.

木部暢子（2011）「天草市本渡方言のアクセント : 動詞句のアクセント」『国立国語研究所論集』2：49-76.

下地理則（2018）『南琉球宮古語伊良部島方言』（シリーズ記述文法１）くろし出版.

新修稲沢市史編集会 編（1982）「第2章 稲沢市方言の構造」『新修稲沢市史研究編６　社会生活下』[『日本列島方言叢書10 中部方言考③（岐阜県・愛知県）』pp. 433-366に再録]